

翻刻・超波十七回忌『はせを』

雲 英 末 雄

本書『はせを』は清水超波（貞佐門。元文五年没。三十九歳）の十七回忌追善集であるが、宝暦期の江戸座俳人がほとんど顔をそろえており、当時の俳壇の動向を考える上でも重要な資料と思われる。以下「書誌」「解題」を付して翻刻する次第である。

書誌

底本 筆者架蔵本。

書型 大本。一冊。袋綴。

表紙 原装、縹色雷文唐草桐花文様表紙。縦二七・三厘×横一

八・一厘。

題簽 欠。中央に剝落の跡あり。

匡郭 四周单边。縦二〇・二厘×横一四・四厘。

柱刻 各丁裏に「因序」「因序二」「一（廿六）」「因跋」（序

跋ともに「下」の一字をこすって削除している。完本と見せるための後人の作為か。）

丁数 二十九丁。

序文 金蓮社旨原（年時記載なし）。

跋文 大学林律砂（年時記載なし）・宝暦六年丙子 翠架井超

雪。

刊記 「松葉軒」（書肆万屋清兵衛）の朱印が跋文の匡郭外に

押印。

備考 本書は底本の他に富山県立図書館志田文庫に一本が架蔵

されている。志田文庫本の書誌を示せば以下の通り（底本

と同一のところは省略）。大本一冊。改装、縹色表紙。縦

二六・五厘×横一八・三厘。柱刻、「下序一」「下序二」（一

（二十六）」「下跋」。刊記「下跋」のあとに一丁あり、そ

れは後表紙に貼りこめられているが、その匡郭の左端に

「宝暦八歳二月 東都松葉軒万屋清兵衛版行」とある。

底本にはこの刊記はなく、「松葉軒」の朱印が跋文の終わ

りの匡郭の外側に押されている。また底本は奉書紙を用紙に用いているが、志田文庫本は楮紙を用いており、かつ底

本の刷りの方が鮮明で、志田文庫本は後刷本の可能性もある。あるいははじめ私家版のごとき配り本として用意され、のちに書肆の手で販売されたとも考えられる。

解題

本書はもと『わかな』『はせを』の二冊で一部を成すものである。そのことは『琵琶の手』付載の万屋清兵衛の蔵版書目中に「^{超波発句}はせを^{追福}」二冊」とあるところからも証せられる。

上巻にあたる『わかな』は玉蛾・桑也編。超波の遺吟十七章に英一蜂・勝間龍水の絵を配したもので、特に龍水の絵はすべて彩色刷であり、初期の色彩絵本として注目されている。『わかな』については、日本古典文学影印叢刊31『絵入俳書集』（貴重本刊行会・昭和61年2月刊）に影印で収め、筆者が解説を加えているので参照されたい。

下巻にあたる本書『はせを』は伝本もごくわずかであるが、資料的にはこちらの方が重要であると思われる。本書は祇丞・買明編。巻頭に「追悼百韻」として、超波の発句「独立て芭蕉に筆を試ん」をもとに脇起しをした百韻一卷を置いている。連衆は、玉蛾・有佐・桑也・祇丞・買明・旨原・超雪・平砂等々三十数名で挙句は百庵。さらに「追悼」として存義・米仲・樓川・湖十・紀逸・再賀・珠来・万立・秀億等々、江戸座の俳人諸家の追悼句を載せている。そのうち太祇の句が入集するのは注目してよいが、すでに志田義秀著『奥の細道・芭蕉・蕪村』（東京修文館・昭和16

年刊）に述べられているので省略する。本書には宝暦期の江戸座の主要な俳人がことごとく悼句を寄せており、没後十七年にしてなお超波の人望の厚さを知ることができる。とりわけ玉蛾・桑也・有佐・祇丞・買明らのものは、長文の詞書を有しており、それらから興味深い記述もみられる。たとえば、超波自身が書き残した発句帳が玉蛾に贈られたとか、超波の三夕の点印は祇丞に、独庵の号は買明が継承したことなどがそれである。その他連城・凡鳥・龍眠・野牛・雪淀・花千・狸眠他の諸侯、三升・慶子らの役者、版下工であり、書肆でもある魚川、あるいは勝間龍水の息で、父と同じく画家の蛇水の入集など、注目に値しよう。

編者の祇丞は三上氏。浮山外・須叟庵・葉舎。超波門。江戸の人。浅草蔵前の札差。宝暦十三年没。編著に『ひとりすまふ』（元文六年）、『田植唄』（寛保二年）、『四夜橋』（寛延三年）、『辛未歳旦』（寛延四年）、『座禅蚕』（宝暦九年）などがある。同じく編者の買明は、交氏、初め高橋氏。独歩庵二世。木原居、筆端と号す。超波門。江戸の人。天明四年十二月九日没。七十四歳。編著に『誹諧長者柱』（宝暦三年）、『五能巻』（宝暦九年）、『旦暮集』（安永七年）、『四人部屋』（天明元年）などがある。

以上簡略ながら本書の解題を述べた。なお翻刻に際しては、以下のごとき要領に基づいて行なった。

一、漢字および仮名の表記は、できうる限り現行のものに改めた。

一、仮名遣い、濁点等は、すべて原本通りにした。

一、裏移りを「丁移り」を「丁移り」で以て示し、丁数を数字、その表・

裏をオ・ウで記した。

はせを
(題簽欠。『琵琶の手』付)
(載藏版書目による。)

かれにもれたる一茎ありあした夕に緑をましたかう生ヒのほりたるたゝすまひ井泉のそらさまに吹あげたるやうにいさきよく曠野の虹のいくすちもたちたるを見たらんこゝちそしぬ峯のまつかせのこれにかよはましかはいつれの緒よりといはんものゝ形もあり亦むら雨のはら／＼と降すさむめるは嘈々としてと聞へし」(下序1オ)撥面の声おのつからなりされはいかなる秋にやありけん亡師これに題して独たつて芭蕉に筆をこゝろみんと幽居閑庭のうちなからも道に独行の意気をかすめ申れしかかそふれは今二むかし三昔なるものから其筆いまたかはかす墨なを硯にたゝえたるかとおほゆるを閑伽の机にとりましへつゝ此日菩提寺にまい」(下序1ウ)れる誰かれ旧知己門人等か韻九十九をつぎて一まきとなし星霜に朽のこりたる古葉をとり／＼しのふはかりなりこゝに人々のしきみ捻香にゆひそへ包みそえしことはの数又それならぬはるなつ秋ふゆのくさ／＼もみな一仏乗のことはりなればあはせつゝりて小草子となせるなるへし凡これらのおもむきは上りの巻にも」(下序2オ)ことはりあきらめたらんにおなしことともいふめるはむかえる山の筈するなりと楊子雲か樵夫には笑はれぬへしされはとていかにせん報恩謝徳のこゝろはせをはと此集の名をわかつことをいさゝかのへ侍りぬ

金蓮社旨原 『(下序2ウ)』

追悼百韻

独立て芭蕉に筆を試ん
秋にきれたる隠逸の履
いくしなくたはねし柴は月漏て
翌出るよしに疎く河舟
松風を我は顔なる酒家の体
黒い兎はよめらせにけり
中間も角前髪は遣ひよき
雪をくゆらす餅春の籠
藁の穂に下りてついにはむ親雀
出女の身の昼を観する
むつかしき守本尊や恋の世に
夏も伏籠に御衣おり／＼
明立に紺青へける絹障子
むら雨わたる多羅葉の音
我儘をいふて老医のけふも出す
秋も最中に蕎麦の記を書
旅衣月も明荷を仕廻ふ頃
桑名祭に宮もそはつく
鉄橋に十と並へし生鰯
居合もしらす今に小頭
夷すら江戸にをく子を蝶や花
広く封て初春の状
摺小木の開牛房にみなめさめ

古人

超波 玉蛾 有佐 桑也 祇丞 買明 旨原 超雪 平砂 書永 庭台 清泉 海如 渭洲 塵匣 東為 超雪 蓮谷 可容 六味 祇丞 坐岩 其畔
1オ 1ウ 2オ

禪を掃く玉はゝきかな

あはれなり橋ひく牛の車すれ
雲の峰たつ町の突抜

土用干虎落の衣もこきませて

ひよろりと伸し妹か鉢の木

しのふ山いつもふもとの心なり

降に極る二十四五日

冬川は漸く蕪を洗ふほと

手のひらて火を運ふ庵室

ほとゝきすさつさ結びや箱伝授

姥捨しをのれか袖も月の雲

芋董のかぶり風のまに／＼

浅茅原虫の間屋の有やらん

律師に成て止る楊弓

饅頭に折の匂ひのうつりけり

下駄を枕に温泉山の犬

紫陽花に摺違ふたる袖の露

中さくへしに御局の哥

宴に時の鼓のうつゝ人

宰のやふれて我もあきるゝ

梢折嵐の朝の月あらは

筏をわたる谷川の鹿

うそ寒く下向はかりの身延山

笙客

麗洲

一蜂

桑楊

風至

虹波

氏野

千尺

九波

丈国

春藤

書永

字后

つなみ

なつみ

星波

台

泉

明

蛾

原

台

如

也

包み貳つを荷ふ脇指

花咲て今年の隙は先明ぬ

芽を吹出す門のかうはり

ひち笠に事触走る春の雨

鼻毛の臂鼻毛ぬく為

書見ても覚えざる身は明簞笥

瓦灯の窓も寒き深更

驚の声の一羽はなれて代かゆる

眼はかりの動く伏勢

国紙に焼飯ふたつ胸合す

猫の手水に入梅や入けむ

物病は伽の背中を几

ごとと響きて待暮の栄

色薄き颯や野路にかゝるらん

由緒正しき黒羽の馬士

有明に起てたはこを寐せる里

露も雫となれば雑巾

あさましき盆の御僧の挾箱

やらいのうちの人と黙礼

引捨し草葉の中の橋柱

病馬のやうに船の焼印

尉ひとり紐の付たる角頭巾

滅た能には笑ふ狂言

水看月も動かす昇て出る

佐

明

丞

如

砂

原

永

佐

雪

蛾

泉

丞

や

砂

明

泉

台

雪

蛾

永

佐

や

原

如

5オ

4ウ

6オ

灯口むけるな枝の木兎
 煩ふて休むもおかし薬堀
 千年屋から汁の瀧
 誦懸の普門品をく駕の棚
 四十を越して初いはた帯
 恋の公事花盗人に居かはりて
 時計の台の中のいとゆふ
 名
 図法師に隙こそなけれ二日灸
 屋敷の米を扶持に喰知ル
 築山の裏をからくむ竹簀子
 子を教へつゝ炎天の蜂
 遊ふ日は底なき蟻の友なれや
 歌舞妓の荷物寺に積置
 薄縁を居風呂呂までの伝ひ道
 座頭は内に寐る事か下手
 吉原の雨は泣人笑ふ人
 池田かはねて仕廻ふ灰占
 冬籠気はもみくちやに成にけり
 家老似合はぬ殿の弟
 月あかきさつきつゝしの盛也
 名
 楽器でつなく天人の彫
 古郷の蜘蛛も笈の小引出
 院宣ひらく一門の数
 鞍鎧ならへ立たる朝日影

砂 明 丞 台 雪 原 泉 明 佐 永 丞 明 泉 如 砂 蛾 追悼
 6ウ 5ウ

石の井筒も責る鏝
 公家に付く麻上下の草展取
 舞ゆく末を見消す燕
 お八ッから夕もよほす花曇
 法のむしろや炉を塞く跡

蛾 原 や 砂 庵 百
 7オ

追悼

十七年の光陰は遠うして近き大磯の夕へ見むと伴ひ
 出つる佛も目ふたにのこりて露わすれぬしたしみは
 我に過すや

看経に鳴たつ沢をおもひ出ぬ

存 義

独庵主いきていまさは五十五それさへみつはさすと
 しにはあらぬよまいて十七秋のむかしなるをや我身
 に来たるおいらくをおもへは心の友にして年の友に
 はあらさりける軟と去ぬしの書すてのものなとくり
 ひろけつゝ招魂するなり

こゝに在り手帛のはしの魂祭

米 仲

超波仏現在世はことし五十年のうへ五はかりにや天
 其才を貸して齢をかさすといひけんむへなりけらし
 身にしみて我年恥る年忌哉

楼 川 7ウ

独歩庵の正忌日は我家の仏にてよく知ンぬ

覚ある人の月日や草の露

湖 十

実それよりは十七年

音たへぬ顔はまさ／＼萩のうへ

紀 逸

新涼にまたわすれぬ清水哉
秋の声この葉は舌に似たる哉

再賀
珠来

古独歩庵のぬしはよそしにたらずして不幸なりき十
七年の今を添てもいまたおしむへきよはひなりされ
と若かりしよりよくその道に入て其時を得これ此叟
の幸なりし

叟は塚も幸あきの草所

一掬の水かけ草やむかし道

万立
秀億

独庵去て十七年忍はしきは此仏也」
8オ

行水やふり向けは夢高燈籠

日の影をうけつはつしつ月今宵

吉門
嘉廷

廷叟此はと旅行なれば此佳句をうつし入ぬ

鼠尾艸の手向屈けん十七度

超波居士十七周忌

栖雀

帡蚕むかしや秋の蝶見てと

まつ虫や森／＼として鉦の音

雞口
柳尾

庭前にひともとをうつし植られけるも遠つ夢なりき
露や人其もとあらの萩あらは

巻返す法の灯影や御文月

超氏の遠忌にかの引墨の朽せぬ功しを懷ふ

田社
8ウ

其秋の暮したはしや古懷帡

碑の露や十七もしをめくる年

図大
露牙

日暮里浄光寺院之内向于独庵之碑而述今歲此秋十七
周遠忌之懷旧その在世超と余と交遊せしこと今更い

は予はいま六旬にちかきまてなからへのこりて去
る秋のすゑの頃より江西の尾久といへる所にすこし
の閑をもとめてまことに世にすてられける侘人の数
に入たり折ふし江都に面出しせる旦夕の往來この碑
の前を過すといふことなしおもふに生前の契死後の
因この日くらしのさとのあたりはとりに住侘吟ひぬ
る事をと懷ひつゝける時

老はれの月日くらしてをる涙

追悼并四季之佳陰任到来之運速
定篇序之前後

はつ雪や小判か降て二むかし

寺／＼の上をもとる欽京の厂

大寺をふところにして紅葉哉

郝隆曝腹中書

日に晒す腹にあらねは涼哉

しら露や一目にかゝる橋の上

鐘つきの撞へらしたる木葉哉

鐘ひとつ椿も一つ落にけり

初ゆきや加賀の家中は仕着せ簀

阮に蚊の髯も穗に出て後の月

名月や此入相に無常なし

あき顔や何をちからに芝の上

岩紅葉はよりいさや箱根駕籠

新豆腐終冬の夜となりにけり

白魚や罪なく見ゆる篩舟

春来
9オ

虹波
星波
九波

敬齋

水路

花六

藤橋

幸之

其畔

千尺

風至

千之

超国

来至

9ウ

月代も二日間や夕すゝみ

衣手に茶碗酒なり鉢たゝき

居姿を立すかたにて月夜哉

蟬や腐れ柱に玉の声

草に見よ寄来る露の魂祭

世の木／＼の情あつめて桜哉

親も子も手を出しにけり藤の花

何を見て身にしむ事そ秋の空

山寺や古井にひゝく鹿の声

後の八百員の四友ひとり先たちて三友のこりとゝま

るはみつから愛へきものゝ又かなし

活のこる三夕暮の涙哉

碑の古びいづれ谷中は露所

七度も十度も巡れ墓の秋

清水影結ふ文月届けかし

春過て菓子に奢や秋の花

梅か咲く牡丹餅か出る古郷哉

雪とちらは霰とつほめ山さくら

光陰の矢にかゝけてや高灯籠

傘にたゝめる雨のさくら哉

すゝしさに何やらゆかし盆の月

雛たつや大工も一日みやつかへ

暗かりの四十に積る月見哉

北窓に塗てかけたる干菜哉

麗来
馬原
連城

10オ

東壁
夫菜
壮夫
龜成
連舎

百庵
二調
氏野
可容
里郷
貞橘
信鳥
万花
仙李
曉翁
蘭泉
笠沢
左伎

10ウ

11オ

独歩のぬしことし十七周なり予総角の頃此翁超巴といひし時よりしれり其後は日夜に誹諧の話などこひしも夢かと疑ふはかりになりぬ三夕の字を点の花押に用ひし風流又門人日くらしのさとに佳句をのこして千歳のかたみとなし侍るなど今さらこゝろなき身にも哀と一句を手向ることになりぬ

日暮里の碑にしられけり秋の暮

凡鳥
超波亡人ことし十七周の追福を祇買両叟其師恩をむくひて法会厚意を尽すのよし予もちなみふかく几辺に俳味を問答せしも今更幻にうかみて猶往年のくり

ことの一句を兩度のもとへ申をくる

なつかしや十七文字の秋経ても

松原に家中そろへる鷹野哉

網引の手足をくゝる千鳥哉

正月を見に出た顔やむめの花

青空のきのふは古し初時雨

名は夢そ萩見し土は有なから

口切や鳥も出むかふ中潜り

芦の葉にかゝる氷柱吹鳴の声

今一度砧にかけむ本の重

蟬に啼明されて鶉かな

紅葉に片側くらき流哉

魂棚もいつれひとりの庵哉

海月にも団の骨はあひぬへし

龍眠

東為
鯉藤
其庸
曉市
蛇水
四明
麗洲
湖天
連馬

11ウ

野牛

素雲
少我

12オ

ことしいまた鯉の声をきかすかの素堂かいひし塩梅
をうらやみて

目に青葉耳になりとも初鯉
はつ厂や空に忘れぬ十七字
花を見る日和もありて落葉哉
朝鮮の見ゆる日よりや渡り鶴
昼の月かゝへて峰の紅葉哉
てうちんにまた暮ぬ野の小蝶哉
法の水にうくや経木をかきつはた
罷書て鸚鵡も鶯る牡丹哉
鼠尾草の雫や今は音にのみ
名月に釣合ほとゝの闇もなし
日暮里や虫の名にたに暮淋し
ちよ能か桶にとゝまる一葉哉
花に葉に池を埋たる蓮哉
かたつふり己を鳶の行衛かな
淋しさもあまれば凄しかんこ鳥
さひしさの毎日かはるしくれ哉
鶯や幾日つれたつ旅の空
袖ぬらせ十七回と鶉啼
音なくて目に見る秋そ天の川
はつ厂を待とはなしに根釣哉
斎僧を迎ひながらに蓮見哉
初厂や近江路さして声の色

雪 浣

社 鼠

秀 谷

程 祥

花 千

催 耕

諫 子

和 山

笙 客

啓 史

芝 光

狸 眠

海 少

南 樓

魚 明

左 竹

友 以

柏 莚

蟠 飛

言 海

專 里

百 字

13オ

12ウ

冬の日や船にもみゆる田舎人

淋しさに画にもかゝぬかかんこ鳥

手かみにて狂哥贈られし事を

秋の声御文に残る仏哉

索フ縄のそれほと長き夜なへ哉

田にもはやうける音あり五月雨

誰書や干鈍干鰯の何右衛門

なつかしき人を集てけふの月

古独庵の付句をおもひ出して

露捨てねちりふくさや草をなめ

此あたり松震つてもさくら哉

稲妻のはちいて行や高灯籠

聞に出て宿また恋し鹿の声

白河へ立と申て冬こもり

雨ならははなれぬ夜着を初雪や

たちはなや連哥の頭のかり座敷

明ほのにしはしさからふ桔梗哉

鶯の歩行所や鉢たゝき

合歡の柳に似たる夕へ哉

紅梅やあかりとりたる呉服店

夜嵐や土へにへ込種なすひ

ひと日ふた日言葉に秋の暑哉

庭中

春雨や土ぬけ出てふきの臺

雅 光

五 雲

雀 童

魯 才

東 巴

ト 尺

破 笠

梅 戸

夜 白

溪 梁

万 輅

浙 江

硯 寿

寥 和

一 鷹

森 羅

密 房

洞 什

釣 深

東 吳

14オ

13ウ

五 星

さみたれや人か酢を乞ふ時あかり 鉦の音に日よりの光る彼岸哉 今はなし曉さそふ萩の友 超波居士の追善に句々を集らるに琉産の寿帯仙香を 贈て 心を祖と為身も膝前に鵲尾を出す かけに寐る猫あたゝかし桐火桶 四つに折角トにこゝろや置頭巾 かけかへる葵の跡の団かな 唐めける陶もかもな簾 桐一葉十七文字の経木とも 人さらに馬も居眠るあつさ哉 郭公高し額の浪のうへ 笹わけし朝のにはひや瓜畑 亡人のなつかしさは 稲妻よ瘦た御坊の影見たき むかし超波俳諧にこゝろさして桑々畔の門に入るよ り我その友となりて俳諧を翫ふ事やゝ年あり其事を けにおもへは 忘れぬそ馴染の筋の墓参 盆過も門は灯籠のなさけ哉 世の中をおもへは廻り灯籠哉 言たらぬ秋の日あしや十七字 月入て何を目あてや草の花	夏若 孟津 文国 14ウ	寧郷 少長 正因 杉風 思路 女 さなみ 来我 黒露 春義 15オ	蓮谷 雲饒 宗吟 宗成 賀亭
--	-----------------------	---	----------------------------

童の棹にあふきや飛蜚
雪はとに夜のさくらの寒さ哉
物いはぬはかり五尺の案山子哉
おふく焚残るあつさをしられけり
ほと／＼の寐覚かしこし／＼の声
初秋やおのれとうこく蚊屋の足
利耳の左にたゞく水鶏哉
関の戸へ一羽立立ちとり哉
角たれて鹿も啼音や萩の奥
飛／＼に暮残しけり菊の花
山寺や四方に見ゆる花の雪
表具地も五色の雲や涅槃像
つい見ゆる哀は桐の一葉哉
女郎花かきりしられぬ小紋哉
小車の花や月日の凡
此ころの心にくさようかれ猫
月の前其僧達は綺羅の人
立ッときに並の揃はぬ千鳥哉
夏草の思やのこして虫の声
咲中におもきおしへや稲の花
秋雨のかゝらぬ袖も涙哉
羽つかひも不肖／＼や帰る厂
二十七哥仙の秀吟にならひて
秋立や蟬の天窓に風渡る

友志 春武 田女 坐岩 連城 富生 原富 馬三 春望 山帶 岩久 春光 魯文 東中 陶巾 蓮干 了因 其籠 麦雨 素什 関月 仙杖 試川	15ウ	16オ	16ウ
--	-----	-----	-----

人絶て鐘も水や峰の寺
 春野ゝや二すち三筋源氏雲
 萋蕩の色を見せたり時雨空
 夏山や日盛ながら闇の谷
 朝貝や宵はもとより筆の先
 さみたれや月にも日にも窓一つ
 入相や花にはうきをけふの月
 はつ秋の音に氣のつく清水哉
 草枕なるや鳴子のこゝかしこ
 家建し年を指折る羽蟻哉
 朝かはの昼寐の夢や二むかし
 夏衣脇指かろき浮世哉
 又留主の亭主をしたる巨燧哉
 紫苑とは花に名乗せ手向草
 蠅ひとつ笠のやとりや五月雨
 秋の日や早くむかしと成にけり
 青桐や棒になれとて一葉つゝ
 味ひに似たるものなし菊の酒
 雷の音聞ゆる歌むしの穴
 水仙や花の位も心の師
 解も風結ふも風の柳哉
 めん鳥の日を恥しむ雉子哉
 一トすみにとしもなれる巨燧哉
 花盛京を竹馬かた車

亘通 楓手 藻舞 鉄突 桃里 賦尺 埃庵 長梢 貫至 万字 三寿 一峰 和喬 なつみ 阿誰 沾郎 南溪 道院 一夏 緑之 菊院 眠江 達平 舩江

17ウ 17オ

上下を着た日もいつか杉菜哉
 谷川に近きふせ屋の砧哉
 此叟に句案の事の手をひかれつる折しも葬や土の上
 這ふ大むかしの句を語りてたゞちかきより句を求む
 へしと誹談せしにおもひよせて
 葬や竹の恩知る其むかし
 初厂にたよりはなしか十七屋
 旅人の食後の息や夕かすみ
 陽炎やきのふは降り岡の松
 くれなゐに瀧を透せるつゝし哉
 足もとに久野ゝ山路のほとゝきす
 名月やきのふ詠し秋の月
 持仏には朝日をともす針たゝき
 世の中や梅曾難を貰へは茄子なし
 鶯や制札の名も御代官
 寐た家の姿あわれや高灯籠
 植木屋の肩にゆれ行若葉哉
 点譜ののこりて十七年のはやき事をなにおもひ出て
 夕くれの三をかゝけて夢の秋
 暮る日を知てとまるや蟬の声
 鐘しのへ一輪ふまぬ花盛
 はつ霜やくらやみにたつ馬の息キ
 夏陰や柳のもとを台所
 聞伝し誹哲を惜しみて追善の手向す

土口 老山 馬廬 吞江 豆玄 六器 三笑 龜好 白清 波山 葛道 松郷 百道 呼童 起月 泰国 律砂 菜陽 芦郷

18ウ 18オ

南無仏思へは桐の散いそき
 俳諧の種残り希かいこ
 炭竈に一トもとしろし山さくら
 さたまらぬ小袖の数や臘月
 芦の葉や三月に分る秋の音
 独歩才超古余波徳照隣
 維君子今余波徳の香蘭
 碑のあたりに盛なる萩はあれと
 小車や十七年のけふの花
 大瀧の音は音にてほととぎす
 なき魂を招きかへせや花すゝき
 風や竹にも渡る宗佐垣
 見る人を土俵なりけり辻角力
 さみたれや静に余る池の面
 鉄砲の音はいつくそ更衣
 梅か香をかりて出茶屋の飢哉
 手拭のほつきと折る寒哉
 とふらふや墓のくるりの虫の声
 月雪の中の香ひや菊の花
 さくら哉風の振舞瀧の下
 衣くや宵の枝折のこほれ萩
 初秋や今朝より音の有枝折
 魂祭座鋪の隅や草の門ト
 水隈や山吹植る瀧の道

芻 狗 浦 口 女 沾 古 花 井 義 蕤 渭 洲 桑 楊 沾 国 梅 動 北 魚 菊 阿 六 窓 一 馬 為 六 味 竹 南 浦 花 礫 百 至 宗 之 松 春 立 志 舞 雀

19オ 19ウ 20オ

いけ鯉も今朝走也氷の貢
 咲といふ機嫌有けり罌粟の花
 春風のたるみて見ゆる彼岸哉
 卵の花や米かし水の細流レ
 かけ香もともに吹るゝ簾哉
 鏝一ふくさひとつや冬こもり
 花の降寺く多き谷中哉
 花ならば門トよこさせん躑躅壳
 接穂する人の姿や頬かぶり
 水底に遊ぶ蛙の日影哉
 霧の香や鼻の先なるいさり松
 猿引や其重たさも我子より
 光陰をいくつも撫る水哉
 山門を這ふてのはるや時雨雲
 文月や仏の国の便まで
 傘に油引日や秋の蝶
 五月雨やいくつかそへる船の道
 秋の夜の客四五人や時鳥
 玉を吐玉を捨ふこの人さりて十有七年
 青朱肉蓴麻子にそゆるおもひ哉
 雨たれも飛さに散か軒燕
 一すちに立よる碑有萩の道
 龍膽の遅きや花の譲り合
 炭壳や小野と聞ゆるよはり声

畔 水 馬 朝 春 色 和 交 残 杏 万 峨 熊 文 孤 吟 松 童 秀 波 冬 野 曾 風 聞 行 超 風 馬 雲 蛙 夕 魚 川 斗 合 大 祇 仙 魚 荻 声 可 圭 十 家

21オ 20ウ

音楽の声の余りや律の風
蘭は是机にのこるにはひ哉

秋日や碑に猶光る浄光寺

とことなく惜しむ夕日の紅葉哉
灌仏の後堂には寐釈迦哉

詣諏方碑

下冷や手のひらに知ル塚の前

極楽の谷中も後の彼岸哉

草／＼に露の花さく谷中哉

新しく鐘ひ／＼く也更衣

拝をする其内涼し玉祭

蝶々の岸行船を行衛哉

裸身へ飛付てゐる蟲哉

詩や哥の心も寒し後の月

吹ぬ日は狐のちらす尾花哉

峠にも蟬の鳴日や二三日

独乗渡しは寒し川衛

横に見る草の光や青簾

叡山は覚へてゐる秋雁の声

脇指に加減はありて踊哉

下司の楽仏の楽も涅槃哉

秋毎に忘れぬ艸の匂ひ哉

月を見てこゝろの旅をする夜哉

松か枝は金のなる木そけふの月

丹鳳
如轍
梅道
砂永
清秋
21ウ

六味
曙山
十町
仙菓
吳寿
魚楽
杉虹
梅幸
栄峨
柳江
梁雲
嵩指
三舛
慶子
秋助
一中
千中
千国
22オ

22ウ

光陰も是はかはゆし梅の花
唐土の吉野の山欽雲の峰
星合や月より前の空の沙汰
なかくなる夜のにくさや菊の花
薺や推もた／＼くも戸はむかし
釣人の夜はきえつゝ月見船
燈籠に昔しのはし若壮
秋の来てあられに刻む茄子哉
清僧のそれはむかしそ秋の声

追薦

古独庵今そかりし時難波江のよしあしとなく生涯の
句を書残されし小冊あり末期の記念にと予に贈られ
けるをとほにひめをき侍りしを今年門人たれかれ望
みに任せ其句牒より撰出し遠回の数に合セ十七章を
並へて聊の追福をなす事とは成ぬ

発句帳繰る声悲し秋の風

ことし文月すゑの七日古独庵遠忌なればとて其門葉
達きたりて追福の一集を催』（23ウ）さるゝよし物
かたりし侍るに予も外ならぬ交をなせし其いにしへ
をおもひ出て一句をつらね牌前に手向るのみ

追福

十七年先のこゝろや墓参り
むかし独庵子伊勢の本土なつかしとてしきりに思ひ
出し事ありしかあるに平砂と予をいさなひ道すから

氷羅
欣洲
蕉鹿
盛府
馬陵
春川
驚石
鬼雀
万里
23オ

玉蛾

桑也

三吟して友柄杓といへる集のたよりになと有しを
つるに其事はたさすしてうちやみぬ其折ふし独庵父
の古さと高田の道場に詣て清水氏の家にいたり瘦法
師の画像に自ラ讃して」(24オ)これを家つとにせ
られしに一族の人々悦びあひてわか宿のおまむき様
といへりしも今さらふるきことくさと成ぬことは
や十七周それかれおもひ出て唯牌前に向ひて嘆する
のみ

我像を祭るや靈の一身田

文月すゑの七日日暮の里へ参て

極楽や十七文字を石の露

長病の耳かなくなるとありし

東西の持仏に古し名角力

夕暮の点印は亡師より伝えて予か艸庵の本尊となせ
る事」(24ウ)年ありしかあれば彫刻のさまうする
き字形ちびたりといへとも師の面影は爰にいますか
ことし常に光陰を石のはたへに感し懐旧の涙とむ
るにいとまあらず

三夕の肉も瘦たり十七年

先師独庵身まかり給ひてより三夕の点印は祇丞これ
を伝へ独庵の号は予これを得たり今其業をなすもひ
とへに師の流れによればなり光陰隙なくことし十七
回忌と成ぬよつて此小冊をなして碑前に手向るも師
の志を繼くに近からん歎

祇丞

平砂

全

有佐

まもるへし古き庵の秋の暮

懐古

町くたりよろほひ出て世をみればものゝことはりみ
なしられけり

蜻蛉の眼にも見えぬや独歩庵

撰待やせめて水汲み柴を折

百勾の巻頭は故叟のめてられしよしをきゝて

面影にたつや芭蕉に筆つむし

大人勢ハ道多氣賜^ハ近^ハ里在^ハ須賀^ハ世^ハ爾僕^ハ幸^ハ比^ハ無^ハ武^ハ那^ハ今^ハ

其志^ハ繼^ハ留^ハ奈^ハ四人^ハ乃^ハ主^ハ乃^ハ儼^ハ不^ハ人人^ハ乃^ハ」(25ウ)列^ハ仁^ハ侍^ハ兩^ハ

效年一十有七回乃月日乃爾^ハ彼面影^ハ言^ハ乃^ハ葉^ハ梓^ハ兩^ハ彫^ハ

且四人^ハ遠^ハ平^ハ慕^ハ夫^ハ詞^ハ嗚^ハ友垣^ハ仁^ハ需^ハ天^ハ奉^ハ兩^ハ秋^ハ爾^ハ之^ハ有^ハ

波礼

句^ハ以^ハ法^ハ乃^ハ千種^ハ也^ハ積^ハ秋^ハ

独庵亡師今年十七回忌になりぬ予も誹諧の道に入事

此年に同じ

身の秋も忘れはせしな十七年

諏訪の浄光寺にまいりて

賤かひく手向となれや引板の水

若菜の画譜に付したる今体の佳什あり輯録せる人々予をしてこれ

買明

25オ

旨原

超雪

書永

兩

兩

兩

兩

庭台

兩

清泉

清

海如

海

26オ

を繕写せしむ辞するにゆるさすたゞ買叟の艸稿に従ひて一葉／＼かそふる間にやかつて名の芭蕉葉となりたるよります／＼禿筆の恥かしきに猶おそらくは差訛多からん事を

大学林律砂書

印(緒) 印(恥) 26ウ

すして一体すてにあらはる破れすかれす又雨ならてよく金の声を」(下跋オ) 響かしめ秋をふることに爰に十七度心尽て心出ツ珠をなし玉を尽す猶華さけや此はせを葉の一まき

宝曆六年丙子

翠架井 超雪

印(翠) 印(架)

胸裏能芭蕉句中の筆その葉いろなく其毛あとなし一画いまた起ら

松葉軒(朱印)(下跋ウ)

新刊紹介

岡本勝
雲英末雄編

『近世文学研究事典』

文学はもとよりのこと、文化全般に亘って近世という時代に対する関心がかつてない程の高まりを見せている今日、桜楓社の創業三十周年を記念して刊行された本書こそ、実に時宜に適った全ての読書人への贈り物であるといえよう。多くの点で近世には現代の風俗、習慣の源があり、それがゆえにそこで生み出された文学も私達にとって極めて親しみ深いものである。しかしながら、それらの発想、方法、表現形式には私達の予め固定化された文学観とは相容れ

ないところが間々あることも否めない。本書は編者の岡本、雲英両氏を始めとして学会の第一線に立って真摯な研究を志しておられる七十一名の研究者達の手で忠実に再現された、常に見え隠れする近世文学全体の鳥瞰図である。私達は本書に導れて、数百年以前の人々のコトバや身振りを窺い知ることが出来る。

さて、その内容であるが——二百四十九項目に及ぶ近世文学に関する事項、書名、人名が十二のジャンル(仮名草子、浮世草子、読本、洒落本、談義本、滑稽本、人情本、草双紙、和歌、国学その他、狂歌、狂詩、俳諧、雑俳、演劇)に大別されて、それぞれ懇切な解説が施されている。各項目は「概要」「研究史・展望」「参考文献」の

順に記されており、とりわけ「研究史・展望」の項が設けられたことで、文学研究の過去の業績を知ると同時に、未来への指針を得ることが可能になった。すなわち、近世文学に於いて「今、何が問題であるのか」が明示されているのである。研究者、学生にとって必備の書であることは改めて言うまでもないが、近世文学に関心を寄せる一般の読者のための恰好な手引にもなるように充分な配慮がなされている。本書によって与えられる近世文学の正確な見取図は、ひとつのモデルとして、文学を愛好する人々が様々な思索の冒険を試みる際の有効な手掛りになることであらう。

(昭61・4 桜楓社 B6版 四一四頁 二八〇〇円)

〔村田裕司〕